

復興まちづくりワークショップ 報告

1.復興まちづくりWSの概要

●日時・場所 平成 25 年 9 月 23 日(月・祝) 13:30~17:00
七ヶ浜町生涯学習センター 2 階大会議室

●参加者 39名
A グループ/家並み・景観：11名
B グループ/自然・環境・減災：13名
C グループ/公園・緑地：15名



●目的 本町では、本年度において「震災復興計画 前期基本計画(更新版)」の作成に加え、移転跡地や景観形成施策を盛り込んだ、「復興まちづくり土地利用ガイドライン」の策定を予定しています。

策定にあたり、今後の復興まちづくりに向けた住民ニーズの把握を目的として、家並みや景観、自然環境や減災、公園緑地などをテーマとした、住民参加によるワークショップを開催するものです。



【七ヶ浜町の全体模型】



【海岸部の模型】

●WSの流れ

- 1) WSの趣旨・流れの説明
- 2) 各テーマの説明 A：家並み・景観/小野田泰明教授、B：自然・環境・減災/宮城豊彦教授、C：公園・緑地/宮城俊作教授
- 3) 各テーマ別ワーキング
A：七ヶ浜らしい家並み形成に必要なこと
B：七ヶ浜の地域・自然特性を踏まえた新しい地域減災のイメージ
C：七ヶ浜にふさわしい海岸の公園・緑地のすがた
- 4) 各グループ発表 A・B・C 各2グループ
- 5) 各先生コメント

2. 各テーマ説明 要旨

●A グループ（全体含む）／小野田泰明教授

- 七ヶ浜町の復興まちづくりは、様々な数多くの計画があり、それぞれが複雑な関係にあり、如何に早く実現するかが重要です。このため、防災の関係は宮城豊彦先生、ランドスケープの関係は宮城俊作先生、災害公営住宅等建築の関係は小野田が担当し、連携を取りながら復興を支援しています。
- 七ヶ浜は、本当に必要な戸数だけの災害公営住宅を地域コミュニティや入居予定の方の声を聞きながら丁寧に整備するなど、地域の実情にあった計画を進めています。
- このため、ハードな整備についてはある程度実現の目算はつきつつありますが、ソフトな運用・運営は住民と一緒に考える必要があります。その第一歩がWSです。



●B グループ／宮城豊彦教授

- 防災・減災については、七ヶ浜のまちの特徴を踏まえて町全体のことを考え、地区の実状を踏まえて地区のことを考え、最後に我が家のこと考えることが必要であり、これが防災・減災を考えるうえでは重要です。
- 我々の地域のことをよく考え、理解したうえで、みんなで防災・減災について考えましょう。



●C グループ／宮城俊作教授

- 復興を考えるうえで、風景・景観について考えることは時期尚早ではないか、と初めは感じましたが、七ヶ浜の実状を踏まえると、皆さんが復興を実感するのは風景・景観が元に戻ることと感じました。そのためには、初期段階から景観について考えることが重要と考えています。
- 七ヶ浜町では、都市公園・津波防災緑地の整備により、これまでの尾根や谷（農地等）の緑に加え、浜（海岸沿い）に新たな緑ができるため、緑の面積は増加します。この緑をどのように整備するのか、どのような施設が必要かを維持管理を含め、みんなで考えましょう。



3. 各グループのワーキング 要旨

●A-1 グループ (家並み・景観)

【グループワークでの主な意見】

A-1 グループでは、新しい住宅団地のルールづくりを考えることで、七ヶ浜らしい景観について意見を出し合った。ルール案(汐見台を参考にした建築協定案)をもとに、模型や写真を使うことで具体的なイメージを膨らませながら議論が進められた。

<建ぺい・容積率>

- ・建ぺい率 70%、容積率 200%(規制を設けない場合の限度)は、隣棟間隔が狭く、暗い印象。
- ・建ぺい率 40%は規制をかけ過ぎではないか。
- ・建ぺい率 60%、容積率 100%はちょうど良い。
- ・家族構成によっても考え方が異なる。

<外へきの位置>

- ・隣が近いと覗かれる心配がある。
- ・樹木のはみだしもトラブルの原因となる。

<高さ・斜線>

- ・(規制を設けないと)日光が当たらない(入らない)ので困る。

<乗り入れ>

- ・メインストリートからの乗り入れは制限が必要。

<意匠>

- ・派手な色彩は無い方が好ましい。
- ・好きなことは外ではなく、中でやるべき。

<敷地境界>

- ・塀は圧迫感がある。 ・コンクリート塀は地震の時に危険。 ・柵で仕切るのが現実的。
- ・腰ぐらいの高さなら塀でも良いのではないかと。 ・塀と植栽の組合せも良いのではないかと。

<その他>

- ・建物の向きはそろった方が良いが、規制はいらないのではないかと。
- ・縁側などの統一は間取りの制限になるので、なくても良いのではないかと。
- ・海が見えるところは低層なども考えられるが、不公平になるのではないかと。
- ・公園に近いところは宅地を入れないなども考えられる。



【グループワークのまとめ】

- 住民の協調性や信頼が大切である。
- ルールを設けないと住環境・安全性・プライバシー等の問題が起きるため、最低限のルールはあった方が良い。



【グループワークの様子】

【グループ発表の様子】

●A-2 グループ (家並み・景観)

【グループワークでの主な意見】

A-2グループでは、小野田教授より、高台のまちづくり等について以下の説明があり、意見交換&質疑応答等を中心に議論が進められた。

「高台に新しい住宅地をつくっていくにあたって、住民主体のルール制定が望ましいのでは…。事例として、岩沼市の建築協定が先行している。」

- ・建築協定以前にルールとなる法律等があるのでは？
 - 都市計画法や建築基準法等が上位にあるが、細やかな規制がかけられないため、住民主体のルールが必要。(現行の200%の容積率、70%建蔽率を模型を使い説明)
- ・ヨーロッパの街並みなどは、どんなルールがあるのか
 - 例えばドイツのまちづくりアプローチは、コミュニティが判断できる法制制となっている等、日本の考え方と違っている。
 - 日本では、建築協定、地区計画等の段階的な決め方を行っているのが一般的で、敷地規模の最低制限、乗り入れ、意匠、屋根の色、敷地境界等をルール化している。
- ・考え方は理解できるが、個人的には、出来るだけ少ないルールが良い。(自主判断で良く、ルールは必要ない。)
- ・建築基準法等だけではよい町並みは出来ないのでは…
- ・現行法で屋根等の規制はかけられるのか。
 - 法律上は、かけられる規制には限界がある。
- ・新しい町に住む皆さんが納得できるルールは必要ではないかと考えている。そのことでバランスの取れた街並みが出来、まち全体の価値も上がるのではないかと。
 - 夕見台が良い見本であり、ルールづくりで価値は上がる。(個々の財産をどのように考えるか。)
 - 通常は、法律の下に協定があり、その次にガイドラインがあり、その運用を住民で行っていくというのは普通である。
- ・笹山のような大きな団地では、隣の家の日陰等の影響は大きくなるのではないかと。団地の規模によってはルールの内容も変えてもよいのではないかと。
- ・ルールをつくることによって、まちづくりの自由度が縛られて動きが取れない。ルールは初めから決めない方がよいと思う。
- ・住民が住みやすいようにするためには、ルールづくりは必要と考える。
- ・新しい住宅地に住むのだから、宅地の価値を上げるためにもルールづくりは必要と思う。



【グループワークのまとめ】

- 色々な意見はあったが、まちづくりにはルールづくりは必要である。
- 法律→協定→ガイドライン等地域にあった形で考えていく。
- そのルールをどのようにして運用していくのか、今後も地区で議論が必要である。



【グループワークの様子】



【グループ発表の様子】

●B-1 グループ (自然・環境・減災)

【グループワークでの主な意見】

B-1 グループでは、震災時の実体験を振り返り、町の全体模型で地形を確認したうえで、今後の避難のあり方など防災について、意見を出し合った。

＜震災時の行動、経験＞

- ・震災前には、年2回防災訓練を実施しており、震災時、避難所への避難に効果があった。津波の被害にあった方は、新たに転入して来た方や避難訓練に参加していない方が多かった。
- ・これまで感じたことのない大きな揺れを感じ避難したが、津波の大きさは事前の情報では判断できず、実際の津波が来て分かった。
- ・携帯ラジオで情報を入手していた。
- ・燃料等の備蓄はしていなかったため、プロパンガス、ガソリンを現場で調達した。
- ・井戸水を電気ポンプで避難所まで汲み上げて生活用水に活用していた。
- ・発電機で電力を確保したが、節電と電気以外(灯油等)で活用できる器具も必要。(避難時の電力は貴重)

＜今後の避難のあり方＞

家庭

- ・自分の命を守ることを第一に考えて行動する。
- ・地震が来たらまず高台へ逃げる。
- ・家族で一緒に居る時、個別に居る時の避難のルールを決めておく。
- ・防災道具を準備して、場所を決めてまとめておく。
- ・非常時の食品や生活用品を備蓄しておく。
- ・避難時のペットのことを考えておく。

地域

- ・できる範囲で、周りのことを考えて共に助け合う。
- ・コミュニティーを大切に、隣人家族構成や避難時に隣人の避難状況を確認しておく。
- ・避難したら入口にプラカード等の目印をおく。(後で役員が確認して歩く必要が無いように)
- ・安全な避難路を複数確保しておく。(道路幅を広げる、道路をふさぐ塀ブロックを取り除く)
- ・避難する時間や、非難する方向も想定して避難訓練を実施する。
- ・避難時の生活、財産を守るため、車を使った避難訓練、避難路の確保を行う。
- ・震災の記憶を風化させないように後世に伝承する。



【グループワークのまとめ】

- 地震が起きたら高台へ避難
- 家族で避難のルールをつくる
- 自分のことは自分で守る(自助)
- できる範囲で助け合う(共助)
- 避難経路の確保
- 自動車を使った避難訓練
- 避難時の情報確認(隣人とのコミュニティー)
- 震災の記憶の伝承



【グループワークの様子】

【グループ発表の様子】

●B-2 グループ (自然・環境・減災)

【グループワークでの主な意見】

B-2グループでは、震災時の実体験や、その後の家庭内での話し合いを振り返り、さらに町の全体模型で地形を確認したうえで、今後の避難のあり方など防災について、意見を出し合った。

＜震災時の行動、経験＞

- ・津波が来るまでの時間や、本当に来るのかが分からないまま避難した。
- ・停電で学校の放送が止まっていた。先生の指示に従い、無事だった。
- ・自分で考え、高台へ避難した。 ・周りの方に声掛けをして避難した。
- ・チリ地震を経験したため、今回も津波が来ると思い避難した。経験が活かされた。

＜震災後の家庭内の話し合い＞

- ・震災前から、地震が発生した場合は、高台の家に避難することを話し合っていた。
- ・祖母の家または近所の公園へ避難することを話し合った。
- ・高台の公民館へ行くよう、親から話をされた。 汐見台の高台へ避難するよう話し合った。
- ・震災後に話し合いはしていないが、家族は皆、地震が発生したらすぐに高台へ避難する意識を持っている。

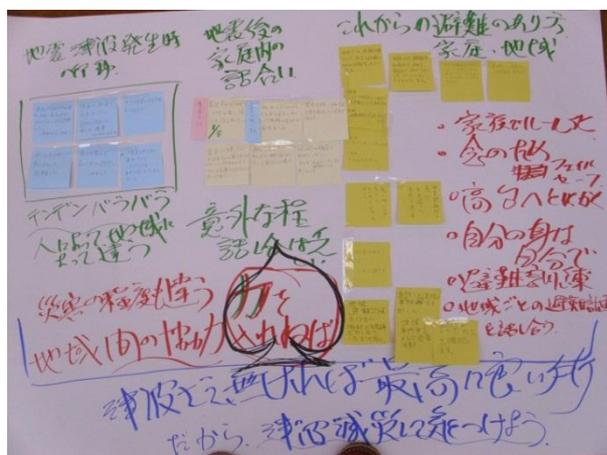
＜今後の避難のあり方＞

家庭

- ・避難する場所を決めて、電話が繋がらなくても、どこにいるか分かるようにする。
- ・てんでんこ(安否確認システム)を確認する。
- ・いつ地震が発生しても、避難できるようルールを決めておく。
- ・自分の命を第一に考えて行動する。
- ・強い地震が発生したら、とにかく高い所へ避難する。

地域

- ・避難場所の見直しを行う。
- ・防災の専門家を呼んで啓蒙活動を行う。
- ・隣の家の方とパートナーを作り、地震が発生したら、みんなまとまって避難所へ避難するようにする。
- ・避難訓練などで、防災の組織と自分の役割をはっきりさせる。協力の精神を養う。“助け合い”



【グループワークのまとめ】

- 地震発生時の行動 … 行動はバラバラ。人・地域によって行動は違う
- 地震後の家庭内の話し合い … 意外な程話、話し合いは乏しい ⇒ 力を入れねばならない！
- これからの避難のあり方 … 家族：避難時の行動をルール化、とにかく高台へ避難する
… 地域：地域毎の避難計画を話し合う 避難訓練の実施

～七ヶ浜町は、津波さえ無ければ最高によい所。 ⇒ だから、津波防災に気を付けよう！～



【グループワークの様子】

【グループ発表の様子】

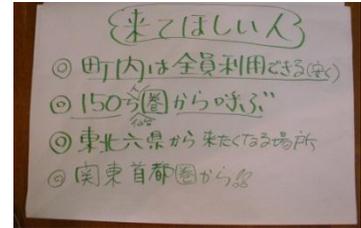
●C-1 グループ (公園・緑地)

【グループワークでの主な意見】

C-1 グループでは、海岸部の模型を囲んで、公園・緑地に関する意見・要望を出し合い、その内容を項目毎に分類することで、公園・緑地の整備要望・管理方法の整理を行った。

<来てほしい人> (丸数字は優先順位)

- ① 町内の人には全員に来てほしい(安く)
- ② 仙台市から来てほしい(仙台の人が来るということはほぼ県内から来る)
- ③ 東北六県(被災された東北他県からも) ④ 関東首都圏から



<どんなものが欲しいか>

- 海**
 - ・フィッシングパーク ・日の出が見える丘
 - ・小学生が遠足で使えるようなハーバー・カニ道
- 防潮堤**
 - ・防潮堤へのペイント(撮影スポットにしたい)
 - ・管理棟(レンタサイクル店等も併設)
 - ・サイクリング、ウォーキング、ランニングできるスペース
 - ・手すり等 ・すべり台 ・階段をカラフルにする

公園

- 【無料】**
 - ・公園用の管理棟 ・バリアフリー対応 ・海水温泉
 - ・セグウェイコース ・ランニング、サイクリングコース
 - ・グラウンドゴルフ ・ペットと一緒に遊べる施設
 - ・母子でも歩いたりできる安心できる視界が見通せる公園
 - ・震災廃材(壊れた家の廃材など)を使った公園
 - ・木の遊具 ・緑のネットワーク ツリーハウス
 - ・ビーチボールエリア ・きれいなトイレ・シャワー(前田波乗りカフェ)
 - ・震災の記録等が記されたオブジェ



- 【有料】**
 - ・野外ステージ ・ジオパーク ・憩いの場所(カフェ等) ・地元食材使用のレストラン ・娯楽店の充実
 - ・クライストチャーチのコンテナハウス、貸コテージ ・海に見える商店街 ・養魚場(ウナギ、カニ)
 - ・貸農園 ・浜辺にBBQ&芋煮、ピザ窯エリア(イス・テーブル付) ・足湯(湊浜に) ・宿泊施設
 - ・フィッシャーマンズワーフ ・小豆浜へ来るサーファー用のパーキング(ゴミをなくす条例も必要)
 - ・バスケットコート(3on3) ・スケートパーク(波が無いときのサーファー、子供などが遊べる)

樹種

- ・マツ ・桜 ・芝桜 ・キノコ(キノコの森で管理費をかせぐ) ・モクレン ・イチヨウ ・季節を感じられる植物
- ・動物が住める森(食べられる実がある落葉広葉樹) ・教育林 ・どんぐり(小さい子供が拾って遊んだりできる)
- ・生態系のためのカニ道 ・緑のネットワーク(生態系確保のため丘から海までの連続したネットワーク)

<維持管理について>

- ・NPO等に委託 ・ボランティア(シルバーセンター、小中学校生など) ・環境条例、海岸条例をつくる

【グループワークのまとめ】

- 緑ばかりではなく、みんなが集まる、遊べる公園にしてほしい。
- 防潮堤もうまく活用して憩える場所、撮影スポット(アート等)として活用したい。
- 植栽は季節を感じられるもの、生態系に配慮した樹種を植えてほしい。
- 維持管理は管理する人や管理費(有料施設)の検討とあわせて条例化が必要。



【グループワークの様子】

【グループ発表の様子】

●C-2 グループ (公園・緑地)

【グループワークでの主な意見】

C-2グループでは、海岸部の模型を囲んで、公園・緑地に関する意見・要望を出し合い、その内容を項目毎に分類することで、公園・緑地の整備要望・管理方法の整理を行った。

＜レクリエーション・利用について＞

- ・人が歩けるようにしてほしい。
- ・見通しをよくする等防犯対策が必要。・夜は、照明がないと危ない。
- ・サイクリングコース、野外ステージ、レストラン、オートキャンプ場、ショップ、駐車場等が欲しい。カニ道が必要。
- ・防潮堤にペイント等を施し、見ても楽しいものに。
- ・子供と遊べるように遊具も欲しい。
- ・大震災の記憶を後世に伝えるような施設が欲しい。
- ・入り口を分かりやすいようにしてほしい。(表浜)

＜緑・環境への配慮について＞

- ・海との一体感をもった感じにしたい。
- ・四季を感じられるような植物を植えて欲しい。
- ・小動物の住める落葉樹等の植物がよい。
- ・ハマギク等、人が来て憩えるように。
- ・津波で流されないよう、根の深い植物を植えて欲しい。
- ・千年の森を作って欲しい。

＜維持管理について＞

- ・ゴミ拾いのイベントや校外授業等で清掃活動等を行っていた。
- ・地区毎の活動は活発であった。
- ・人が集まる場所が不良のたまり場になっている。
- ・マナーに関する条例や美化条例等が必要
- ・管理作業をイベント化する等の取り組みが必要。
- ・観光産業として、そこで商売をして、その人達に維持管理をやってもらう。

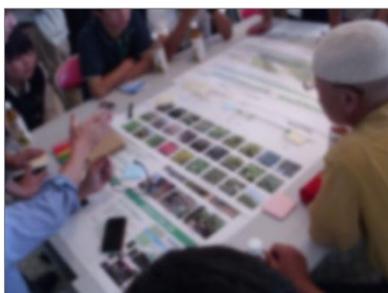


【グループワークのまとめ】

- 子供も大人も安全に歩けるようなまちづくりをしていくのが大切。
- サイクリングロード、フィッシングパーク、レストラン等を作ることで町外から人が呼べる。
- 防災面も必要だが、資産として季節感を感じられるように多様な樹木を植えて欲しい。
- ケヤキなどの明るいイメージの植林をして子供達が安心して遊べるように。
- 根の深い樹木を植えて、津波でも流されないようにする必要がある。
- 美化条例等をつくって、ゴミを減らすようにする必要がある。



【グループワークの様子】



【グループ発表の様子】

4. 各先生のコメント

●小野田泰明教授

- 七ヶ浜町は、町民の皆さん、役場の皆さん、専門家のコミュニケーションが比較的良好で、これまでは丁寧に復興まちづくりが進められてきました。これからは、そこにどのような建物を建てるのかということを考える必要があります。
- まちづくりのコンセプトと現実の生活の間をどのように繋げるのかを考えることは、面倒で手間がかかることかもしれませんが、今日のような議論を続けていけば、有意義な枠組ができあがると考えています。
- 七ヶ浜町の復興まちづくりは、他の市町より進んでおり、そのため難しいことに最初に直面してしまうわけですが、皆さんと一緒に乗り越えられると感じました。



●宮城豊彦教授

- 七ヶ浜は美しいまちであり、皆さんも、そのことに自信を持っていることを再認識しました。
- 私は、七ヶ浜に移り住んで28年になりますが、当時に比べ、今は七ヶ浜に住む私たち自身の意識・行動が変わり、そして、まち自体が美しいまちに変わったのです。
- 大きな震災を乗り越え、復興整備が進められていますが、これから先も自信を持って、このような取り組みを続ければ、「訪れて良し、住んで良しのまち」が実現すると確信しています。そのためにも今日の会議は、大事な節目になると感じています。



●宮城俊作教授

- 七ヶ浜町以外の方がこの町を訪れて欲しい等、皆さんの七ヶ浜に対する想いが強いことを今日あらためて感じました。
- 最近、観光という意味が少しずつ変化しつつあり、「訪れて良し、住んで良しのまち」という言葉があります。これは、これからのまちづくりにも通じる考え方であり、住民が住みやすく、美しいと感じ、それを訪れる人が短時間でも体験してみたいと感じるということです。
- 大切なことは、住み続ける、持続可能なまちであることであり、そのために、どうすべきかをみんなで考えることが重要です。これからも、そのために必要なお手伝いをしていきたいと考えています。

